研 究 者：西村　瑠美（所属：広島大学大学院医歯薬保健学研究科口腔発達機能学）

研究題目：2・3年生合同実習の学習効果についての検討

目　的：

広島大学歯学部口腔健康科学科口腔保健学専攻では、2年生と3年生が合同実習を行っており、本実習では、3年生が2年生に対して、1年を通して歯科衛生過程に基づいて実施している。合同実習は、学内教育で習得した知識・技術の総括となる応用的な学習であり、臨床実習前に患者対応の基礎を学ぶ重要な実習である。また、2年生は患者体験から、今後の内発的学習意欲を高めることにつながる実習でもある。合同実習の学習効果を検証することで、高度な学識と医療技術を備えた歯科衛生士の育成を目指した教育プログラムの展開を行う上で重要な基礎資料となると考えられる。そこで本研究では、合同実習後の自己評価・他者評価から、合同実習の有効性を検討することを目的とする。

対象および方法：

対象は、広島大学歯学部口腔健康科学科口腔保健学専攻2・3年生81名（平成27年度：2年生18名、3年生23名、平成28年度：2年生22名、3年生18名）とした。

本学の合同実習は、4月、6月、10月、11月の4回実施している（図1）。

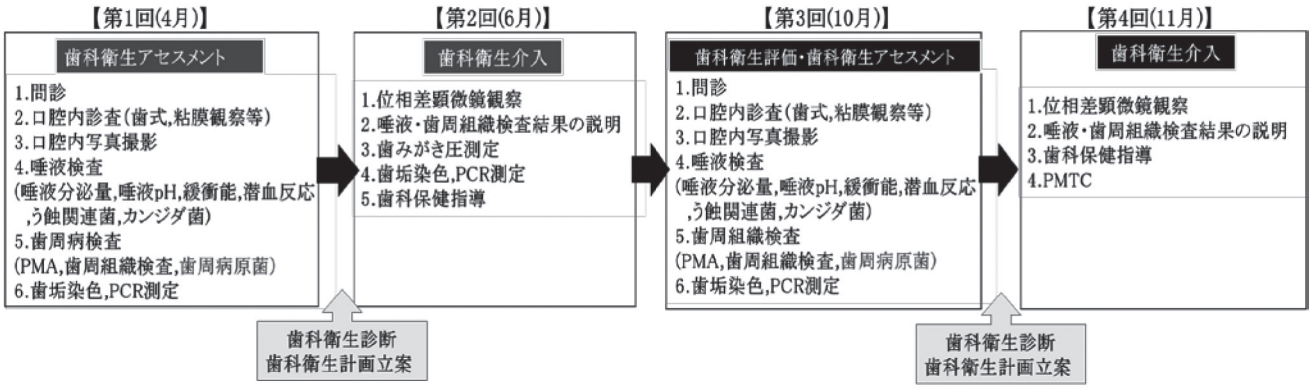

図1　合同実習概要

平成27年度、28年度の合同実習後に、3年生の歯科保健指導行動に関して、2年生は他者評価、3年生は自己評価として自記式質問紙調査を行った。質問紙は「理解的態度」「意欲・刺激・目標」「不安やストレス解消」に関する20項目であり、評価は「1. 全く思わない」「2. かなりそう思わない」「3. あまりそう思わない」「4. どちらでもない」「5. ややそう思う」「6. かなりそう思う」「7. 全くそう思う」の　7段階評価とした。

統計処理は、学年別比較をMann-Whitney U検定、回ごとの比較はFriedman検定後にWilcoxon符号付き順位検定（Bonferroni補正）で多重比較を行った。

全ての検定は、統計ソフトSPSS®（Ver.22.0 IBM、東京）を用いて行い、有意水準は5%とし

た。なお、本研究は広島大学倫理委員会の承認（承認番号 E-784 号）を受けて実施した。

結果および考察：

結　果

学年別に比較をすると、3 年生の自己評価に比べて、2 年生の他者評価が高かった。「3 年生の緊張」の項目のみ、2 年生に比べて 3 年生の評価が有意に高かった（$p < 0.05$）（図 2）。

1 回目から 4 回目までの評価の変化を経時的に検討した結果、2、3 年生ともに回数を重ねるごとに評価が上がる傾向にあった。3 年生の自己評価では、「思いやりのある態度」、「気楽に話ができる環境づくり」の項目では、有意な差は見られなかったが、その他の項目では、経時的に有意な差がみられた（$p < 0.05$）。一方、2 年生の他者評価は、3 年生の「よいところを褒めたか」について、回を重ねるごとに有意に評価が上がっていた（$p < 0.05$）（図 3）。3 年生の歯科保健指導への他者評価が高くなっていた。

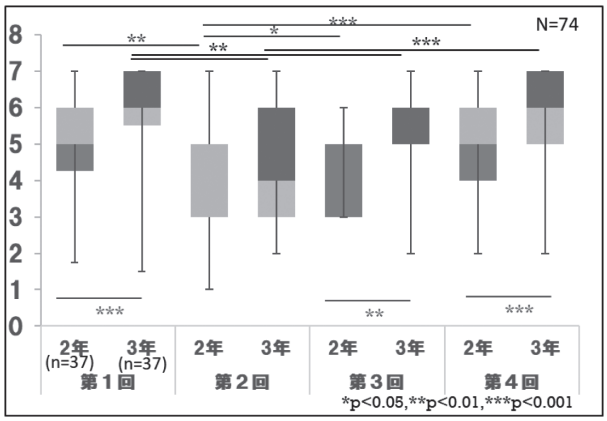

図 2 「3 年生は緊張していたか」への回答について学年および回数ごとの比較

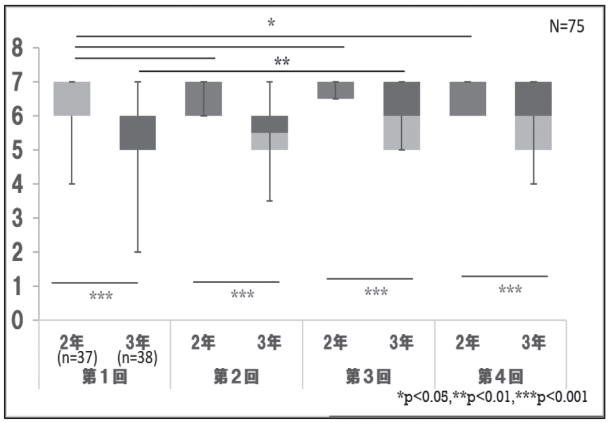

図 3 「3 年生はよいところを褒めたか」への回答について学年および回数ごとの比較

考　察：

2、3 年生ともに回数を重ねるごとに評価が上がる傾向にあったことから、本実習は、3 年生の患者対応技術の向上に有益であったことが示唆された。歯科衛生過程のアセスメントから評価までの全てを、1 年を通して 自身が実施することで、2 年生の行動変容を体感できたことが、3 年生の自己評価の向上につながったと考える。また、自己評価に比べて、他者評価が高かったことから、2 年生の内発的学習意欲も向上させることができたと考えられる。

本学の合同実習は、2、3 年生の両学年にとって有用であることが示唆された。

成果発表：（予定を含めて口頭発表、学術雑誌など）

第 8 回日本歯科衛生教育学会総会・学術大会　ポスター発表